令和７年度　入学試験（公募推薦）問題

国　語

受験番号		氏　名	

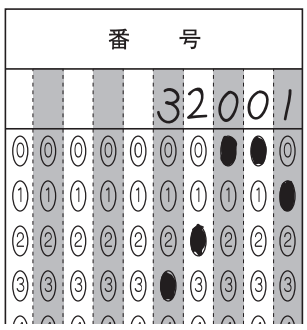
○　指示があるまで開かないこと。
　令和６年10月19日(土)　10時05分　～　10時50分

【注意事項】
1　試験問題の数は28問です。
2　問題用紙及び解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入してください。解答用紙は下記の記入例をみて記入してください。
3　解答は、指示に従いすべて解答用紙にマークしてください。問題用紙に記載しても無効です。
　なお、解答用紙には解答欄が50問まであるので、注意してください。29問以降にマークしても無効です。
4　試験問題にはすべて５つの選択肢があります。質問に適した選択肢を選び、その番号を解答用紙にマークしてください。
　なお、２つ以上マークした場合は無効となります。

【解答用紙記入例】

フリガナ	セイ　トウ　ハナ　コ	年	月	日	国語
氏名	聖灯花子	6	10	19	

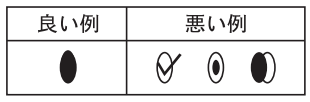
〔受験番号記入例〕



問	解答欄	問	解答欄	問	解答欄
1	①②③④⑤	11	①②③④⑤	21	①②③④⑤
2	①②③④⑤	12	①②③④⑤	22	①②③④⑤
3	①②③④⑤	13	①②③④⑤	23	①②③④⑤

※番号欄には、右づめで受験番号を記入し、該当部分の数字をマークしてください。

マーク例



令和七年度　入学試験（公募推薦）問題（国語）

一　次の文章を読んで、後の【1】～【5】に答えなさい。

私はお茶を一度も習ったことはないが、飲むことは好きだし、お茶室の雰囲気も嫌いではない。嫌いどころか日本の文化の［＊］は、あの小さな空間に集約されつくしていると思う。ただ面倒なお附合いにはついて行けないものがあり、茶臭というものが我慢ならない。兼好法師は徒然草の中で、「そのものにつきて、そのものを費し損ふもの、数を知らずあり」といい、「君子に仁義、僧に法」ⓐなどをあげているが、書家の書、茶人の茶も、その中に入るであろう。別言すれば、技芸化された所にダラクははじまるので、お茶は本来そういうものではなかったはずである。

ではどのようなものか、ひと口にいえば、人間同士の附合いにつきると私は思っている。面倒な附合いは御免だという口の下から、こんなことをいうのはおかしいが、面倒なればこそ小さな座敷の中で、完璧な世界を造ろうとするのではないか。お茶室とはいわば自分の心の中に、他人を容れることであって、お座なりの社交は自他ともに許されない。応対はその時々で変っていなければならず、道具も相手によって違って来る、そんなことはわかり切ったことだが、「お道具拝見」などといって、一向感心しもしない茶器に、感心したふりをする馴れ合いが、私には我慢できないのである。

「一期一会」という言葉がある。一生に一度の出会いと思って、人に対する意味だろうが、考えてみれば我々みんな明日をも［㋐］命である。「今」という瞬間は二度と還っては来ない。だから大切にせねばならない。これもわかり切ったことであるが、私などは年をとるまでほんとには理解できなかった。相手が人間だけとは限らない。たとえば桜の花を眺めても、来年はもう会えないかも知れないと思うと、はじめて見るように美しく、生き生きとして来る。たとえば骨董屋で好きな焼きものに出会うと、この機を逸して二度と見ることは出来まいと、無理をしてでも買ってしまう。そうして家へ持って帰り、花器なら花を活け、茶碗ならお茶をたてる。そういう瞬間の幸福は、天地をわが物にした気分である。私のお茶とは、そんな他愛もないものだから、とても茶道の世界で通用するようなⓑシロモノではない。

私共の家は古い農家を直したので、大きないろりが［＊＊］ある。釜は持っていないので、鉄瓶をかけているが、松風とまで行かずとも、雑木林を吹きすぎる風の音程度には楽しめる。原稿を書き［㋑］時、そこで一服お茶を飲む、別にいい考えが浮かぶわけではないが、いらいらした気持は鎮めてくれる。何のことはない、お茶は私にとって鎮静剤のかわりなのだから、優雅な趣味とは関係がない。よれよれのパンタロン姿では、わびもさびもあったものではない。が、この頃のように、やれ公害だ、闘争だと、不安な毎日を送っていると、戦国時代の乱世に、何故お茶みたいなものが発達したか、よくわかるような気がする。死と隣り合せていれば、しぜん生を楽しみたくもなる。不安だ不安だと叫んで、何もしないでいる人は、ほんとの恐しさを知らないのであろう。

一期一会とは、私流に解釈すれば、結局自分自身と出会うことである。人の一生は一回こっきりしかない。だから幸福になることは、人間のつとめであり、責任でもあると思っている。他人を不幸にして、自分だけが幸福であり得ないのは、わざわざつけ加えるまでもない。まろやかなお茶の味は、私に、そういうことを語りかける。

それによく似た茶碗の触感も、遠い昔の世界から、そういう言葉を伝えて来る。机の上には、椿一輪。そして、今夜のお客様は、読者である。

（白洲正子『私のお茶』）

【1】空欄㋐㋑に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 1 2】

1 ㋐ ①思えぬ ②見えぬ ③開けぬ ④知れぬ ⑤定めぬ

2 ㋑ ①そこねた ②よごした ③あぐねた ④つらねた ⑤そんじた

【2】傍線部ⓐⓑの漢字として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 3 4】

3 ⓐ ①惰落 ②駄落 ③楕落 ④妥落 ⑤堕落

4 ⓑ ①白物 ②素者 ③代物 ④代者 ⑤城物

【3】空欄＊と＊＊に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 5 6】

5 ＊ ①精 ②髄 ③妙 ④粋 ⑤真

6 ＊＊ ①刻んで ②切って ③削って ④掘って ⑤測って

【4】この文章の筆者の著作として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 7】

7 ①『放浪記』 ②『たしなみについて』 ③『世阿弥』 ④『縁あって』 ⑤『夢幻抄』

【5】波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 8】

8 ①出会いを大切にすることこそが最も大切であるのに、われわれはそれを忘れがちだ、という思い。
②自分自身を見つめ、人と共に幸福になれるよう努めることこそが、茶の教えでもある、という思い。
③人生は一度のみ、という真実を肝に銘じ、茶の道に打ち込むことを改めて心に誓った、という思い。
④「一期一会」に込められた、人と共に幸福を願うという教えを、ようやく理解できた、という思い。
⑤誰にも人生は一度のみである以上、自分だけの幸福を願うことは茶の教えに背く、という思い。

二　次の文章を読んで、後の【6】～【10】に答えなさい。

おふくろは、紙になにか文字を書くときはきまって鉛筆で書いていた。鉛筆以外の筆記用具――毛筆だとか、万年筆だとか、ペンだとかが、家になかったわけではない。けれども、おふくろはいつも鉛筆を使っていた。それも、手のひらのなかにすっぽり隠れてしまうほどにちびた鉛筆ばかりで、芯もまるくなったのを使っていた。

それでは書きにくいだろうから、すこし削ってやろうかというと、いらないという。芯が尖っていると、いまにも折れそうな気がして、思うように書けない。それに、書くといってもべつに大したことを書くわけでもないのだから、放っといてくれとおふくろはいった。

実際、おふくろは鉛筆を使うといっても、大したことを書くわけではなかった。つまり文章なんぞを書くわけではなかった。手紙だって文章だから、おふくろは手紙を書くわけでもなかった。私はおふくろが誰かに手紙や葉書を書いているのをいちども見たことがなかった。それではなにを書くのかというと、忘れないためのちょっとしたメモの(a)である。ひさしぶりに手紙をくれた人の住所とか、買物の品目とか、漬物を漬け込む日程とか、そんなものを古封筒の裏や、新聞紙のきれはしや、剥いだ日暦の余白などに書き留めていた。

おふくろは、明治の小学校を出ただけで、文字など書くのは苦手であった。たとえちょっとしたメモのようなものでも、それを書くときは＊した。見ていると、まず鉛筆の芯をちょっと舐める。それから、力を入れてごしごしと書く。すぐ、つかえる。鉛筆の尻で頭を掻く。またごしごしと書く。つかえる。今度は左右の腕をぽりぽりと掻く。

「なるほど、かいてるなあ。」といって冷やかすと、「黙ってなせ。」と、おふくろは怒る。覗いて見ようとすると、「駄目（わかんね）。」といって、子供のように両手で隠す。だから、私は、二十（はたち）を過ぎるころまで、おふくろが書いた文字を見たことがなかった。自分のおふくろがどんな文字を書くのか知らなかった。

私は、郷里の高校を出ると、東京の大学に進学した。けれども、学資を貰っていた兄に不都合なことがあり、一年だけで中退して郷里へ帰って、中学校の助教員を二年勤めた。それから、また一年間、受験勉強をして、おなじ大学へ入り直した。ちょうど最初の級友たちが卒業したあとへ、私はまた一年生として入学したわけである。

私は、安い学生寮に入っていた。寮生は(b)貧乏で、みな郷里からの送金を待ち兼ねていた。郵便配達が門を入ってくると、どの部屋の窓も一斉に開いて、「俺、○○、きてない？」「××ある？」そういう声が飛び交った。私には、毎月二度に分けて、ぎりぎりの生活費が届いた。それにはいつも父の手紙が入っていた。父は若いころから商家の帳簿を付け馴れていて、達筆であった。文面も律義そのもので、かならずどこかに浪費を戒める文句が入っていた。

ところが、あるとき、いつものようにして届けられた書留の封筒を開けてみると、いつもよりすこしすくない金額の為替と一緒に、ついぞ見馴れない鉛筆書きの手紙が出てきた。

『前略。お元気でしか。父さんがとちぜん病気で倒れますたすけに、わたすが代って手紙を書きまし。……』

手紙はそう書き出されていた。いうまでもなく、おふくろが自分で書いた手紙である。私は、おふくろは手紙など書けないと思っていたから、はらはらしながら読んでみた。父が脳軟化症で倒れたときの様子が、こまごまと書かれていた。手紙の常識に囚われずに、自分の見たままを残らず知らせようとする文章が期せずして迫力に富んだ描写になっていた。何事もまるで目に見えるように書かれていた。私は読み終って驚いた。

おふくろの手紙は、田舎言葉がまる出しになっているところを除けば、まず、よい手紙だといってよかった。よく見ると、鉛筆の文字には一つ一つに濃淡があり、芯を舐めながら一字一字力をこめて書いたことがわかった。これだけの手紙を書くのに、おふくろは何日夜ふかしをしただろうかと私は思った。鉛筆の芯で頭を掻いているおふくろが、目に浮かんだ。両腕を掻くぽりぽりという音が耳の奥によみがえった。

あのときの、あのおふくろの手紙が忘れられない。

父はもうとっくに亡くなって、おふくろは今年八十四になるが、いまでも時々郷里から鉛筆書きの手紙をよこす。相変らず芯を舐めながらごしごしと書いた手紙で、いまだに田舎言葉まる出しである。甚だ郷愁をそそる手紙だというほかはない。

（三浦哲郎『おふくろの筆法』）

【6】傍線部「メモの」に続く(a)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 9 】

9 (a) ①てあい　②ぶもん　③なかま　④たぐい　⑤かたち

【7】傍線部「貧乏で」の前に置く(b)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 10 】

10 (b) ①まずまず　②おおむね　③がいして　④ことさら　⑤しばしば

【8】空欄＊に該当する語を、①～⑤から選び、その番号を記入しなさい。【解答欄は問 11 】

11 ①難詰　②渋滞　③難解　④遅滞　⑤難渋

【9】この文章の筆者の著作として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 12 】

12 ①『万延元年のフットボール』　②『忍ぶ川』　③『ユタとふしぎな仲間たち』　④『おろおろ草紙』　⑤『白夜を旅する人々』

【10】波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 13 】

13
①田舎言葉まる出しの手紙を見るたびおふくろのことが思い出され、一度帰省しなければ、という思い。
②何日も夜ふかしして書いてくれた手紙こそ、おふくろらしさの詰まった最高の手紙だった、という思い。
③頑張って手紙を書いている姿を想像するたび、少しでも長生きできるよう大切にせねば、という思い。
④自分の心を正直に伝えるために必死なおふくろの、優しさとありがたさを再認識できた、という思い。
⑤田舎言葉まる出しの手紙こそ、おふくろの温かさそのものだと最近になって確信した、という思い。

三　次の問【11】～【15】の記述のなかの□に用いる言葉としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【11】
「二人の間には、一時、□な空気が流れていた。」【解答欄は問14】
14 ①不満　②不穏　③不正　④不明　⑤不安

【12】
「この事件には、実は□が敷かれていた。」【解答欄は問15】
15 ①琴線　②曲線　③混戦　④稜線　⑤伏線

【13】
「あの宝石のためなら、金に□はつけない。」【解答欄は問16】
16 ①欲目　②網目　③潮目　④糸目　⑤節目

【14】
「彼の言動には、無責任という□がまぬがれない。」【解答欄は問17】
17 ①裁き　②顰み　③誹り　④嫉み　⑤憚り

【15】
「もはや、彼女の企画に□を見い出すしかない。」【解答欄は問18】
18 ①活路　②岐路　③遍路　④理路　⑤針路

四　次の問【16】～【20】のことわざの空欄の語として、最もふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【16】
「□食う虫も好き好き」【解答欄は問19】
19 ①稲　②柿　③蓼　④稗　⑤粟

【17】
「急いては□を仕損ずる」【解答欄は問20】
20 ①態　②事　③物　④業　⑤体

【18】
「疾風に□を知る」【解答欄は問21】
21 ①雑草　②海草　③毒草　④勁草　⑤薬草

【19】
「縁なき衆生は□し難し」【解答欄は問22】
22 ①推　②挙　③処　④接　⑤度

【20】
「知恵ない□に知恵つくる」【解答欄は問23】
23 ①神　②天　③仏　④空　⑤童

五　次の問【21】～【25】の書き出し（カッコ内は作者）で始まる作品の正しい名称を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【21】「私（わたくし）はその人を常に先生と呼んでいた。」（夏目漱石）【解答欄は問 24 】

24
①『吾輩は猫である』　②『草枕』　③『坊っちゃん』
④『明暗』　⑤『こころ』

【22】「横浜の港には、雨雲が低く垂れこめていた。」（瀬戸内寂聴）【解答欄は問 25 】

25
①『夏の終り』　②『花芯』　③『かの子撩乱』
④『花に問え』　⑤『場所』

【23】「私は、その男の写真を三葉、見たことがある。」（太宰治）【解答欄は問 26 】

26
①『ダス・ゲマイネ』　②『走れメロス』　③『人間失格』
④『ヴィヨンの妻』　⑤『斜陽』

【24】「腕時計の針は、まだ十一時を示していなかった。（有吉佐和子）【解答欄は問 27 】

27
①『紀ノ川』　②『開幕ベルは華やかに』　③『華岡青洲の妻』
④『恍惚の人』　⑤『複合汚染』

【25】「八月、ひどく暑いさかりに、この西松原住宅地に引越した。（遠藤周作）【解答欄は問 28 】

28
①『白い人』　②『沈黙』　③『侍』
④『海と毒薬』　⑤『深い河』